

かけだ詩③

そだちと臨床研究会

かわばた たかし
川畑 隆

お口よいし

(よろしければ声に出してお読みください)

すいきんチカモク
どてんカイメイ

ヤブラこうじの
ブラこうじ

かんかんガクガク
けんけんゴウゴウ

タケダのしんげん
ウエスギけんしん

にそくサンモン
さんぞくセンエン

クロマニヨンじん
クルマにおんねん

いまそのとき

どこの親もそんなに
立派には生きていない
そのとおり
立派になんか生きなくていい
ふつうでいい

子どものことで心配があっても
ふつうのまま
波風が立ったとしても
どうにか幸せにやれたら
それでいい

でもそのままでは
うまくいきそうにないとき
子どもの幸せを潰しそうなとき
いやそんなときでも
親は立派に生きなくていい
ただ一生に一度でいい
眠った力を奮い立たせたら
それでいい

親が立派じゃないから
子どもに心配事が起きるんじゃない
親がどんなふうでも

一大事は起きない
あるいは起きる

起きたなら

いまそのとき

そんな人生のポイントってある

心のケア

震災後の航空機到着ロビーからの中継
来られた目的は何ですかとインタビュアー
心理士なんですけど

被災者の心のケアをしに来ました！
と答えるとても元気な若者の声

何の迷いもないような

聴いた言葉の座りが悪くて心がざわつく

意味はわかるけど

医師から治療にきたと聴いた時には

感じないもの

その前の大震災のときに

それこそ「心のケア隊」を組んで

避難所にお邪魔した時のこと

「あんたらなあ 心のケアなんて要らんねん
風呂を沸かしてよ 風呂に入られへんねん」
でも風呂を沸かせたらよかったと強く思った

心理士のなかには

看護師や保健師さんを羨む声

聴診器や血圧計を使って話し込めるから

心理士もマッサージができる人は

それを活かす人もいる

それに比べて

「お話しを聴きに来ました」とは

それこそ手持無沙汰で

「心のケアをしに来ました」

としか言いようがない人がいるかもしれない

でも若者よ もうちょっと恥じらいをもとう

医師による治療は

まずしなければならぬことだけれど

やること やったことが心のケアだと言えるのは

そのやったことが

少しでも役に立った後なんじゃないだろうか

役に立ったかどうかかわからない時には

心のケアだったかどうかは保留するセンスがあつていい

たしかに 最近 心のケアはカウンセリング

手段が心のケアと命名されているふしがある

そこにもう少し敏感になっていい

心のケアは目的

手段としては
上手な風呂の沸かし方もメニューにあっている

ことば狩り

おまえは
御前(おんまえ)だからなあつて
語源を持ち出して弁護しても
おまえは有罪だって

有罪だから言うなと言われて
言わなければ付度 黙従
わざわざ言えば挑戦 挑発
言った後から気づけば後悔 緊縮

おまえと言うなの伝言ゲームは
その言い出しっぺよりも
何番目の伝言役に
左右されたんじゃないだろうか
言葉は時代によって変化してゆく
文化とはそういうものだとしても
誰かの気まぐれと追従も
その仲間に入れてもらえるのだろうか

きさまは
貴様(きさま)だと踏ん張って主張しなくても
取り沙汰されていないし
そもそもあまり使わない

おまえの受難のとき

同志

僕が思ったけど言わなかったことを
まさにその時
君が言った

僕が言いかけてやめたら
それを引き取るように
君が続けた

やっぱり君は
僕と同じことを考えている
そのことに
また新しく気づいた
同じ空気がずっと二人をとりもってきた

日常に貼り付く経験と思い出

でもいつまでたっても

同じでないことへのいらだち

違うことへの反発

同じでないのに同じ

それは 同じでないから同じ

同じが優しいのは

同じでないのを踏まえているから

同じなのに違う

それは 同じだから違う

違いが尖っているのは

同じを知っているから

この同じと違いを繰り返し

互いの中に納めてゆく同志の営み

三度(みたび)たじろぐ

ねえ 何してるの？

トコトコとやってきて

扉の向こうからそつと探る声

何してる？って問われても…

ねえねえ 何してるの？

…あのお ウンチしてるの

そう ウンチ がんばってね

…うん おとうさん がんばる

扉から遠ざかる小さな足音

トコトコと

円環

医師にだけあるのか

診断の責任

診断とは

根拠をもとに決めること

それを行うのは医師の義務

診断がないと治療はない

しかし

決められなくても

決めなければならぬ

医師の役割と悩み

愛着障害

その子の母の精神的不調

それが決め手の診断

医師は心ならずも迷いに蓋をした

ところが

医師が下した診断名

権威あるものとして独りで歩く

その日から地元で

母はすっかり養育不適格者になった

不適格であることが決まれば

その証拠はいくつでも見つかる

まるで

適格である証拠には頬被りをするように

子どもの問題状況が続けば

母が精神的に不調になることぐらい

許してもらえないか

そんな母でも

ふつうの母親の一員に入れてもらえないか

人を理解することに忠実になるほど

決められないことは増える

「わからない」ということ

「そうじゃないかもしれない」という表明を

医師にも許そう

診断名を聴く側の責任として

的さがし

大切な人の顔が曇っていたら

どうしたんだろうととても気がかり

その人のところから離れられない：

大切な人の顔が晴れていたなら

もう放つといっても大丈夫

さて私は何をするといい場所だったっけ：

だから家族全体を見渡す

援助が必要なものは

目の前の子どもじゃないかもしれない

母が自殺しないか見張っていた中学生

大家族のなかで

母の不調を見抜いていたのはその子だけ

登校してこないその子に

登校刺激を控えて見守ってあげようって

いったい何をしていることになるんだろう

登校刺激：子どもを登校するように仕向けようとする言動

③了 二〇二〇年六月三〇日